つむじ風のち晴れ

古世古和子・作/山本まつ子・え

創作子どもの本　2

つむじ風のち晴れ

古世古和子

金の星社

つむじ風のち晴れ

創作子どもの本　2

1974年6月／発行©

著者／古世古和子

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社**金の星社**

東京都台東区小島1丁目4－3
電話／東京03－861－1506(代表)
振替／東京64678

印刷／特進印刷株式会社
製本／株式会社　小林製本所

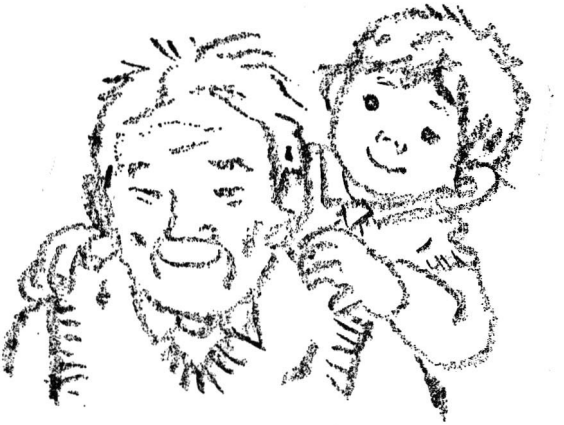
乱丁落丁本はおとりかえいたしますので、お求めの書店または本社へお申し出願います。

913　古世古和子
つむじ風のち晴れ

金の星社　1974
147P　22cm(創作子どもの本2)

基本カード記載例

8393-041021-1406



はじめに

古世古 和子

あしたは……。

あさっては……。こんどの日曜日には……と、あなたは、どんなことを楽しみにしていますか。

この物がたりの中のおじいさんも、「あしたが楽しみ……」と、いいます。そして、主人公のミツルは、「おじいさんのあしたの楽しみってのは、なんだかかわってるな」と、おかしがったりします。

さて、おじいさんのあしたの楽しみとは、また、よろこびとは、どんなことでしょう。

もくじ

ゆびを三本つき出して……6
トラ床のトラさん……31
きりきりまい……66

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はさみ事件……104
あしたが楽しみ……121
あとがき……144

作者・画家紹介

古世古和子（こせこ かずこ）

1929年，三重県に生まれる。1953年，小学生朝日新聞に応募，童話「雲の子の希望」が入選。著書に「わらった白いミミズク」「ねことトオルとヤジロベエ」「竜宮へいったトミばあやん」「キリキリのパイプ」などがある。

現住所ー東京都八王子市中野町2038

山本まつ子（やまもと まつこ）

1925年，北海道函館に生まれる。一水会の富田通雄・自由美術のまつやまふみおに師事。絵本とさし絵の仕事で活躍。おもな作品に「リコはおかあさん」「はじめてのおるすばん」がある。日本児童出版美術家連盟，童画集団所属。

現住所ー世田谷区尾山台3ー15ー22

創作子どもの本　2

つむじ風のち晴れ

古世古和子

ゆびを三本つき出して

ミツルとおとうさんは、市役所まえでバスをおりました。あとにつづいておりてくる、お客さんのうしろから、くびをのばして、おかあさんが口早にいいました。

「それじゃ、なるべく早く帰ってね。風がひどくなりそうだし、夕方は冷えますから。」

「ああ、わかったよ。そちらも気をつけていっておいで。」

手をあげた、おとうさんのことばがおわらないうちに、ドアーが

しまりました。

ドアーの中で、おかあさんがうなずき、座席にすわったマチ子が、手をふりました。声はきこえませんでしたが、「おにいちゃん、バイバイ」と、いっているようでした。

おかあさんは、おぶっているユタカの健康しんだんをうけるため、病院へいったのです。ユタカは、ミツルとマチ子の弟で、生まれて六か月目の赤ちゃんです。

ミツルの家は、ここからは、北の方角にあたる北野町にあります。家の近くの、北野町五丁目という停留所から、二十分ほどバスにのってきました。おかあさんたちは、もう七、八分のって、終点の駅前までいきます。病院は、駅のすぐ近くにあります。

「さあて、いこうか。」

バスを見送っているミツルのかたをたたいて、おとうさんは、あるきだしました。

ふたりは、これから、元町のおばさんの家へいくのです。

停留所のすぐそばから南へまがって、百メートルほどいくと、おばさんの家です。おばさんの家から、七、八十メートルもいけば、商店やデパートや銀行がならぶ、大通りへでてしまいます。

五、六日前から、きゅうに風がつめたくなりました。午後になってふきだした風が、きょうも強くなりそうです。あつぼったいカーディガンやコートをきた人たちが、大通りの方へいそぎ足でいきます。

あと五日で、十月もおわりです。

酒屋、かし屋、けんちく事務所、くつとげたをならべた店、ラー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

メン食堂など、あまり大きくない店々のまえをすぎると、おばさんの家のサインポールが、すぐ目につきます。

赤、白、青が、ななめのぼりにくるくるまわっているサインポール。おばさんの家は床屋なのです。

まっ白なかんばんには、青くくっきりと、『理容 Tiger』と、横に書かれています。

「目がまわって、すいこまれちゃうぞ。」

サインポールをみつめているミツルをからかって、おとうさんは、ウインドーの横手にある木戸の中へ、はいっていきました。

「おや、ミツルちゃんも、いっしょにきてくれたの。」

ガラスのドアーから顔をだして、おばさんがいいました。

「さあさあ、おくへどうぞ。」

のりのきいた白衣のポケットへ、たたんだかみそりをさして、おばさんは木戸をゆびさしました。

「むかえにきてくれるって、お電話もらったものだから、おじいちゃん、そわそわしちゃってね。なんどでも木戸をあけて、通りばかり気にしていたのよ。」

通りばかり気にしていたおじいさんを、おばさんも気にしていたのでしょう。ほっとしたようにわらって、ことばがはずんでいます。

おじさんも、お客さんのかみをとかしていたくしを、ちょっとふりあげて、「玄関の方へまわって……」という、手ぶりをしました。

ミツルは、木戸をおして、玄関へとかけこみました。

「おっ、ミツルもきてくれたのか。」

居間から、せかせかと、ろうかへでてきたおじいさんは、うれし

くてたまらないというように、目を細(ほそ)くして、ミツルを見ました。
「おや、また大きくなったじゃないか。二年生になると、少しのまにもおにいさんらしくなるね。さ、あがらんか。」
ミツルはもう、くつをぬぎすてて、ろうかへあがっていましたが、「こんにちは」をいおうとした口からは、ひとりでに、もんくがでてしまいました。
「えー？　二年生だって？　ぼくはね、三年生だよ。わすれんぼだぞ、おじいちゃんは。このまえきたときも、そういったろ。」
おじいさんの目のまえへ、ゆびを三本つきだして、ミツルは口をとがらせました。
「うん、そうか。そうそう、三年生だったな。」
おじいさんも、あわてて、ゆびを三本立てると、のどをゴロゴロ

ならしているような、わらい声をたてました。

「わすれんぼのミツルに、わすれんぼといわれたんじゃ、おじいちゃんの方がうわてかな。ハハハ……」

居間から、ろうかの方へくびをのばして、おとうさんがわらいました。

「まあまあ、にぎやかなこと。なにをそんなにおかしがってるの。」

お店の方から、おばさんがろうかへあがってきました。仕事場のことを、おばさんの家では、「**お店**」といっているのです。ろうかが、居間とお店をくぎっています。

ぬいだ白衣をかべにかけて、おばさんはミツルたちの顔を見まわしました。

「なに、ミツルがね、おじいちゃんに二年生かといわれて、おこっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com